

生徒の多面的な成長を支える防災教育の推進
～防災小説の取り組みからの広がり～

土佐清水市立清水中学校

1、はじめに

海とともに生きる本市は、近い将来起こる南海トラフ大地震では最大津波高34メートルが想定されており、10分後には17メートルの津波が市街地を襲うとされている。津波に備えるため「旧」清水中学校は高台移転し、土佐清水市内5中学校が統合し、1市1校の中学校として平成25年度、生徒数350人で「新生」清水中学校としてスタートした。平成28年度から2年間「実践的防災教育推進校」の指定を高知県教育委員会より受け、本事業の研究主題を「自ら判断し主体的に行動できる生徒の育成」として取り組みを進めた。

本校は、市街地高台にある耐震設計のなされた校舎であるため、校舎の倒壊や津波から避難する必要性が低く、津波を含む震災に対する意識は不十分であると言わざるをえない。また、土佐清水市が推し進めている市街地の高台移転などの事業もあり、津波浸水予想地域外に自宅がある生徒も増えつつあるため、生徒や保護者によって地震や津波に対する意識には個人差がある。しかし、市内全域から登校する生徒たちは、約70%が津波浸水予想地域に自宅がある。またそれ以外の生徒においても普段の生活では、津波浸水地域で活動することが多くあるため、いっどこで地震が起きても自らの命を守り抜くことが出来るよう、知識や行動力が備わった生徒になって欲しいと考え、本主題を設定した。重点目標を「自分の命を守る」「知識を備え判断する」「地域社会に貢献する」として取り組みを進めてきた。

2、研究の概要と実際

- ①生徒・保護者の防災への意識調査を行い、課題を明らかにして防災意識の向上を図る。
- ②生徒が主体的に行動し、正しく判断出来るように様々な場面を想定した避難訓練を実施する。
- ③有識者の指導・助言を受け、充実した防災教育を行う。（防災に関する知識理解等）
- ④地域との合同避難訓練を実施する。
- ⑤各学年で「地震・津波・避難所運営」を中心とした防災に関する研究授業を実施する。
- ⑥防災教育研究発表会及び講演会を開催し、防災教育の啓発・普及を図る。

<平成28年度の具体的な取り組み>



○4月15日：校外活動中（遠足）の避難訓練

大岐の浜から津波避難タワーへ避難（全校生徒、教職員の約300名が10分以内で避難完了）

○5月27日：第1回防災意識調査アンケート

○5月30日：1年生、津波の石碑フィールドワーク実施（三崎地区、下ノ加江地区）

○6月3日：講師招聘による防災教育講演会

講師：慶應義塾大学大木聖子准教授

演題：地震の正体を知り、命を守る

○7月16日：防災学習参観日…地区別に区長さんが授業に入り、助言を頂く。

○9月3日：地域との合同避難訓練（下川口地区）

○9月14日：愛媛県愛南町立御荘中学校防災教育視察研修（防災教育担当3名参加）

○9月15日：公開授業（3年生：避難所運営について）清水中学校・清水高等学校合同防災学習講演会

講師：慶應義塾大学大木聖子准教授

○9月21日：校内研修 避難所運営ゲーム（HUG）

○10月19日：大木聖子准教授授業参観（1年生）

と防災教育を実施計画通りに推進してきた。



学習を実施する際に指摘されていたことは、津波の想定の高さから来るあきらめが地域の意識としてある中で、生徒たちが主体性を持って臨むための当事者意識をどのように持たせるか、ということであった。

3年生は、大木准教授による避難所での各係別課題解決訓練の授業を行った。そして、災害時に命をつないでいくため、防災学習で調べた内容について、小学校への出前授業を行った。地震・津波についての説明や、命を守るためにしてほしいことなどを、小学生により理解しやすいように分かりやすくまとめ、児童や小学校の教員にも高評価を得た。

2年生は、本校が災害時避難所になることから避難所運営ゲーム（HUG）や、大木准教授のゼミで開発した「四コマ漫画」による避難所での課題解決訓練等の防災学習を行った。

1年生は、防災学習の中で、地図や写真から通学路や普段の遊び場などの避難場所を確認するとともに、スクールバスでの下校途中の避難訓練も実施し検証も行った。また、生徒たちが主体的に行動し、正しく判断し、命を守る行動が出来るよう、地区別での防災学習、フィールドワーク、災害用伝言ダイヤルの実習、な場面を想定した避難訓練、地域との合同避難訓練の実施、各学年で「地震・津波・避難所運営」を中心とした防災に関する研究授業の実施、防災教育講演会の開催等と進めてきた。

このように、各学年で当事者意識を持たせるためにどのような取り組みが有効かを考えながら研究を進めてきた。しかし、知識・理解は進んできたが、伝えること、教えてもらうことや避難訓練を行うだけでは効果は限定的で、全ての生徒が当事者意識を持って防災教育を進めることには難しさがあることを痛感した。その点について大木准教授に助言を仰ぎ、「防災シナリオ」という手法の提案を頂いた。個々の生徒が置かれている生活状況の中で、南海トラフ大地震が起きた場合を想定して「Days-After」（「まだ」起きていない出来事をあえて「もう」起きてしまったものとして語ること）を語るシナリオを作成することを通して、これまでの防災学習を自分自身のこととして捉えることができ、大災害の知識や理解が進み、地域社会や自分自身の将来も想像することができるようになる。というものであった。

そこで、当時の1年生が10月以降の防災学習の中で、「11月3日文化祭当日の下校途中の16時30分に南海トラフ大地震が起きた」と想定してシナリオを作成（以下、防災小説とする）し、防災小説として取り組んでいった。地震で揺れている状況、揺れが収まってからのこと、避難していく途中や避難場所でのことを、不安な気持ちや心の変化、周囲の状況をこと細かく表現していた。校内文化祭においては、5名の生徒が発表をした。スライドを作成し、小説の状況にあった画像を入れ、効果音を付け小説を朗読した。聞いている生徒たちや保護者・教職員も、それぞれの発表に聴き入っているのが分かるほどであった。

○文化祭で発表した防災小説の一例（平成28年度）

『 私はいつも通りバスに乗って帰っていた。友達と楽しく話したり、きらきらと輝く松崎の海岸を見ながら、バスが下川口につくのを待っていた。すると、突然運転手さんが急ブレーキをかけた。地震が起きたのだ。運転手さんが「地震だ！」と叫んだ。やっと揺れが収まるとみんな外に出た。波が大きく揺れ始めるのが見えた。私は必死で避難場所までの坂を登った。木や家が崩れ、ブロック塀が崩れている。お年寄りの人々たちにとっては足場が悪い状況である。後からは「津波が来るぞー！」という声が聞こえる。私が避難場所に着いたときは小さい子からお年寄りの方までたくさんの方が避難していた。空は暗くなり、たくさんの星が輝いている。街灯のあかりもない。食べ物もない。知らない人もたくさんいる。家族や友達は大丈夫だろうか。私はただ一人、ぼう然としていた。これから私は一人でいられるだろうか。もう一度地震が来るんじ

やないだろうか。そんな不安感を持ったまま一晩を過ごした。すごく、すごく、長い夜に感じられた。翌日、私は地震が来る前に家族と話し合っていた連絡方法をとった。それは「171」という番号を使ってする「伝言ダイヤル」というものだ。近くの人に携帯電話を借りて、さっそくなにか伝言があるか確かめてみた。すると「もしもし、こっちは大丈夫、みんな無事だよ」という家族の声だった。私はほっとして今までこらえてきた涙がこみ上げてきた。よかった。よかった。私はよかった、という心でいっぱいになっていた。ずっと不安だった心が少しずつ溶けていくような気がした。

南海地震。それは予想をはるかに超える恐ろしいものだ。この日のためにみんなに備えてきた事や家族で話し合ってきたことが、本当に大切な事だと改めて感じた。』

自分が主人公の防災小説を書くことで「生徒たちがギアチェンジした」と防災担任は語り、学びの「わがこと化」への手ごたえを感じていた。



3、平成 29 年度の研究主題及び仮説

研究主題を『生徒の多面的な成長を支える防災教育の推進』とし、最高学年である 3 年生が「防災小説」に取り組むことで、大災害への知識や理解が深まるとともに、地域社会や自分の将来も想像することができるようになるのではないかと仮説を立てた。生徒にとって多面的な成長につながる効果のある取り組みになるのではないかと仮説の下、平成 29 年度の取り組みを開始した。

4、「Days-After」を語る防災小説への取り組み

意識づけのために春休みに保護者、地域への防災アンケートを実施し、地域の現状を踏まえたうえで、3 年生でこの防災小説に取り組んだ。「2017 年 6 月 5 日朝 7 : 40 分に南海トラフ大地震が発生」として全員が防災小説を書いた。どの生徒においても、大災害を生き抜いたことや家族との再会、地域の高齢者への支援行動などが書かれていた。その取り組みを 6 月 5 日中高連携「防災教育パネルディスカッション」として発表する機会を持った。3 年生代表 5 名と清水高等学校防災リーダーの生徒 5 名がパネラーとして登壇するとともに、大木准教授にコーディネーターをしていただいた。地域の方々の参加や報道関係者の取材もあり盛大に開催することができた。



○パネルディスカッションで発表した防災小説

『息を切らしながら、もう少しで学校だ。と坂を上がっていたとき、ゴン！と低く大きい音になった。転んだのだ。だけど、そんなことはどうでもよかった。それは、今起きている地震のことで頭がいっぱいだっただからだ。目を開けると建物が崩れていた。僕は、家族のことを考えた。どうしよう。どうしよう。どうしよう。…どうしていいかわからず、その場にうずくまりさげんでいた。すると見知らぬ人が「何をしている。そんなところでうずくまってどうする。生き延びるんだ。逃げるぞ!」と低く、力強い声で言ってくれた。なにか焦げ臭い。道路のほうから声が聞こえた。

助けを呼ぶ声だった。「助けてくれー!!」と男性が叫んでいた。車のドアに足を挟んだらしく、急いで救助した。まず、男性に「今助けます。痛いですが我慢をしてください。」と落ち着いた声で話しかけた。動転しているらしく、返答がおかしい。軽のワゴン車だったから、ドアから引っ張り出すのは簡単だった。それから、肩を貸して体育館まで運んだ。そして連れていく途中、自分が今できることを考えていた。体育館に着いた。友達や家族、校長先生は無事なのだろうか。生きてるといい。そんなことを考えている。体育館入口には、避難者の名前が張り出されていた。本部の仕事をしているのは生徒たちだった。さすが仕事が早いと思った。「ゴォォー」という音が響いた。たぶん津波だろう。まだここにいる人は少ない。増えてくるといいな。下を向いてブツブツ言っていると、肩に何かがぶつかった。それは押し寄せてくる人たちの肩などだった。うれしい反面、皆焦っているから自分優先の考えにならないか不安だった。「早くしろやー」と怒鳴りつけてくる人もいた。他にも自分の要求を叫ぶ大人たちがいた。自分は、興奮している人達を落ち着かせるために、「落ち着いてください。よく周りの人を見て、発言してください。」中には我に返る人もいたが、静まらない人もいた。自分の無力さを感じて、避難所の運営にあたることにした。～中略～それから数か月が経った。自分ら中学生は勉強をしつつ復興の手伝いとなっている。国の援助の場所は偏っていたが、それでも助け合いで生きてきた。この町ならすぐに復興でき、活気が取り戻せる。そんな気がした。』

○ある生徒が防災小説を作るうえで意識したこと

想定にとらわれず、自分たちの住んでいる地域では何が起こるかを想定し、それに合わせて小説を作った。地震発生から状況を整理し、避難所に避難、家族との再会という流れを意識した。また、地震の凄さが伝わるように表現に気を付けた。

<上の生徒のパネルディスカッション後の感想>

『自分たちの地域で起こる可能性のある災害について詳しく考えることができた。地震への対策をしていくうえで、自分の住んでいる地域はどのような災害が発生するのかということを経験から考えていくことが大事だと思う。地震発生後、地域によっては高齢者が多く避難が大変になるところもあると思うが、そういう時こそ周りの大人たちと連携を取り避難を促すことが重要だと思う。また、その為に地域の人たちとの繋がりも大切にしなければいけないと思う。』

5、防災小説の取り組みの検証

防災小説に取り組むことで、生徒たちは、それぞれが災害時に自分自身がどうなるのか、どのような行動をとるのか、何ができるのか、できないことは何か等、様々なことを考えることができた。防災学習や避難訓練、避難所運営、伝言ダイヤル実習など、取り組んできたことが自分のとる行動として確実に文章化されていたことも分かった。

平成28年度この取り組みを行った当時1年生において、平成28年度実施した防災意識調査(5月・2月実施)の結果に大きな変化があった。「外にいるとき自分で判断して揺れから身を守ること」ができると答えた生徒が71%から90%に、「一人で登下校中の安全な場所への避難」ができると答えた生徒が69%から94%となった。このことから防災小説に取り組んだ効果が表れていると考える。

平成29年度の3年生は、平成28年度、避難所運営訓練(HUG)、修学旅行において語り部学習等を行ったが、防災小説には取り組んではいなかった。平成28年度実施の防災意識調査では「一人で登下校中の安全な場所への避難ができる」が39%から57%と変化したものの、意識の低さがあった。平成29年度、防災小説に取り組んだ後に実施した防災教育パネルディスカッションや土佐清水市総合防災訓練等による相乗効果もあり、意識についてはかなりの変化が見られ、自分自身のことから社会へと目を向けられるようになってきた。アンケートでは「避難について具体的に考えた」が90.6%、「地域の危険や弱点についてあらためて考えた。」が91.8%、「地域の人々の安全について改めて考えた。」が88.2%、「小説を書いたあとも防

災について考えるようになった。」が74.1%と大きく意識に変化が見られた。

6、取り組みからの広がり

平成29年9月3日、土佐清水市総合防災訓練（行政・自主防災・医療・自衛隊・海上保安庁参加）へ学校として参加し、3年生を中心に避難所の開設・運営訓練を行った。避難所運営訓練では、各係が防災リーダーを中心に真剣、かつ意欲的な態度で取り組み、避難者として参加していた下級生や教職員、保護者、地域の方々に丁寧な対応を行っていた。訓練後の振り返りでも、生徒たちは課題となったこと、今後改善策として次の学年に申し送ることや取り組むべきことを具体的に考え、発表していた。

平成28年度から取り組んできた防災教育については、大木准教授の支援と繋がりにより、NHK厚生文化事業財団の支援へと広がりを見せている。地域・行政も巻き込んだ取り組みで大変大掛かりな取り組みになってはいるが、これから起こる南海トラフ大地震へ向け「一人も犠牲者を出さない土佐清水市」をキャッチフレーズに、本校の取り組みが、市民の防災意識を高め、地域に貢献できる取り組みとなることができればと考えている。



7、平成30年度の確かな取組へ

実践的防災教育推進校の指定は終わり、規模は縮小して取組を進めようとして計画していたが、試行錯誤しながらの取組は、確かな取組へと変わってきた。3年生は、1年生の時から防災小説に取り組んできた学年であるので災害に対しての当事者意識は育っている。高知新聞社主催の「いのぐ塾」では、東日本大震災で被災された東北福祉大学の鈴木智博さんの講演で、生徒たちは講師に対して震災時の状況やその時思ったこと、女川いのちの石碑プロジェクトの事など、生徒たちから鋭い質問が多く出された。その後の地域住民との懇談会でも3年生の防災リーダーが参加し、地域住民代表の方々の防災意識を高めるのに貢献していた。その時の様子は、高知新聞にも「中学生の高い防災意識」という見出しもつけてもらい、中学生が地域の防災意識を引っ張ると大きく取り上げていただいた。講師や取材に来ていた多くの報道関係者からも中学生の意識が高いと評価をしてもらった。そのことは、生徒たちのさらなる意識の高まりにもつながっていった。



夏休み、土佐清水市防災士連絡協議会の委員の皆さんの協力を得て「防災かまどベンチ」を作成した。このベンチは、災害時避難所となった場合に使用するために作成したものです。9月21日の避難所運営訓練で炊き出し訓練も併せて行い「かまどベンチ」を使用した。

○避難所運営訓練について

地区防災のリーダーの方々にも参加していただき、避難所運営訓練を行った。3年生が計画から実施まで意欲的に積極的に対応して見事に避難所運営を行っていった。教員と慶應義塾大学の大木ゼミの学生もアクシデントを起こす避難者となって参加し、英語だけしか話せない外国人や腕が痛い女性、何かとクレームをつける男性など、どのアクシデントやクレームに対しても丁寧に優しさを持った態度で接していた。わずか2時間程度の避難所運営ではあるが、その大変さも感じながら、一生懸命訓練を行っている様子が見えた。

今回の避難所運営訓練では、振り返りの時間の中に、災害後一週間が過ぎた避難所で校長が運営する側の心のケアをどのようにしたら良いのかという設定で、実際に高知大学医学部精神神経科の須賀医師を招いて、医師に相談をするというロールプレイを見せ、運営側のケアをしながら避難所を運営する必要があるということを理解させる時間を持った。生徒たちの受け取りも良く、災害時は運営側も避難者であることや一生懸命やりすぎることがストレスとして蓄積されていくことなども理解していたようである。この取組は、今後の避難所運営を考えていくうえで必要な取組であると考え。この取組の提案も大木先生によるものだが、国立精神・神経医療研究センターのストレス・災害時こころの情報支援センターの活動の一環で行ったもので、ロールプレイのシナリオも世界的に有名な金吉晴医師に作成していただいた。様子は、国立精神・神経医療研究センターのストレス・災害時こころの情報支援センターHPにも報告されるようになっている。



8、令和元年度の更なる広がりのある取組へ



令和元年度からは、全学年で防災小説に取り組むこととした。1年生は、「発生時から避難所へ避難するまでの過程を書く」、2年生は「避難所での生活（避難所生活が始まって1～3日目くらいのことを書く）」、3年生は「地震発生から復興に向けての自分の行動や周囲の様子を書く」を各学年のテーマとして作成をした。毎年書かせることで、成長段階に応じた内容を書くことができると思っている。実際に3年生は、避難所での運営から復興へ向けての明るい未来を築いていくことに貢献したいという内容のものが多かった。防災小説については、各学級で発表し代表者を決め、各学年の代表者として文化祭で発表した。その発表した防災小説は、毎月1編を土佐清水市広報に掲載していただいている。今も続けて掲載している。

内容のものが多かった。防災小説については、各学級で発表し代表者を決め、各学年の代表者として文化祭で発表した。その発表した防災小説は、毎月1編を土佐清水市広報に掲載していただいている。今も続けて掲載している。



10月27日は、土佐清水市総合防災訓練に参加し、清水中学校は避難所サテライトとして運営訓練を行いました。総合防災訓練は平成29年度以来の参加だが、前回と変えたのは教員側が動いて指示をするのではなく、3年生が運営側の中心となり市教育委員会や健康福祉課、社会福祉協議会等と連携して避難所

運営を行った。防災リーダー中心に立派に運営を行った。1・2年生は避難者役となり本番と同じように避難者カードへの記入や傷病者となり協力した。運営側の3年生は、クレームや要望に対する対応など難しいことも体験した。他の機関や各係との連携もあり避難所の運営が予想以上に難しく感じていたようだった。炊き出し訓練も行い、非常食300食を準備するのは本当に大変だったようだ。その他では、伝言ダイヤルの体験、ボランティアへの参加についての学習も行った。毎年参加していただいている慶應義塾大学の

生には、午後の振り返りで沢山の事を助言いただいた。また、10名の大学生も参加しクレーマーになってもらった。運営側の3年生も色々配慮をしながら適切に丁寧に対応している姿もあり、きっと清水中学校の生徒たちが大災害からの復興へ向けた大きな力になってくれると信じている。

9、生徒の多面的な成長の支えに

大きな広がりもあった実践的防災教育の推進ではあるが、その取り組みを通じて生徒たちは「主体的・対話的で深い学び」を実現してきた。防災小説を通して自己との対話を進め、自分も他者も命を守るためにはどう行動すべきか、を考えた。自らの考えを持ち、他者との協働により未知の状況にも対応できるように考え、考えたことを実際の体験の中で生かし、将来も社会との関わりを持って生きようとする姿勢が生まれてきた。これは次期学習指導要領で目指している資質・能力であると考えている。避難訓練を経験したのちには、彼らから「自信と不安」という言葉がよく聞かれた。自分たちが考えたことが周囲の人の状況を変えうる力になるという自信、しかし、考え、体験をくぐらせたがゆえの「実際に災害が発生したときに起こる事態に自分が対応できるか」という不安である。この不安が次への課題として、探究的な学びにつながっている。



しかし、本市を離れてもその場所でまた可能な限りの活動をしたい、また将来南海トラフ地震によって被災した場合に本市から離れて過ごしていた場合にも「自分なりにできることをしたい」「(人口が少ないので)仲間に呼び掛けて自分にできることをしたい」「今の清水や今の時間を大切にしたい」と語る彼らからは防災小説によって「Days-After」を考えたからこそ、その日の前の自分たちのありようや、周囲へのかかわり方や郷土の良さを考えることにつながった。このように、防災教育は「防災」だけではなく、道徳教育における価値項目や災害時にどう人権を守るかという人権教育の視点、自己有用感を高め、汎用的な力を自覚させるキャリア教育の視点、そして各教科の指導なども入っており、カリキュラム・マネジメントによってさらなる「深い学び」につながると考える。このように多面的に生徒の成長を支えることができる防災教育は、今後の学校教育の中で求められると考える。

自分たちの学びが社会の何かを、誰かの心を動かしている、という実感は、生涯にわたって学び続ける力の育成にも繋がる。生徒ひとりひとりが郷土への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、日本や高知の未来を切り拓く人材に育ってくれると信じている。

赤	体	、	れ		に	ん	い	が	い	で	ら	か	い	く	っ	か				防
ち	育	今	な	道	行	な	た	、	る	妹	二	、	る	市	っ	°				災
ゃ	館	日	い	に	く	気	°	針	°	は	次	け	だ	街	て	や				小
ん	に	は	°	は	°	持	時	は	今	泣	避	が	ろ	地	い	っ				説
の	着	三	い	物		ち	間	四	、	き	難	を	う	は	る	と				く
鳴	いた	十	つ	や		を	も	時	何	叫	所	し	°	建	の	津				避
き	°	分	も	電		胸	分	五	時	び	で	て		物	場	波				難
声	体	ほ	な	柱		に	か	十	な	、	あ	い	な	や	所	が				所
や	育	ど	ら	が		抑	ら	七	の	街	る	な	友	車	か	お				で
お	館	か	五	倒		え	な	分	か	中	市	い	達	な	ら	さ				の
年	の	か	分	れ		な	°	わ	気	に	民	だ	は	ど	は	ま				生
寄	外	っ	ぐ	て		が	怖	さ	に	は	体	ろ	生	が	見	っ				活
り	か	て	ら	い		ら	い	し	な	警	育	う	き	た	え	た				は
の	ら	、	い	て		、	°	た	っ	報	館	か	て	な	な	よ				く
人	は	よ	で	、		走	苦	ま	て	の	に	、	い	い	う	°				
の	、	う	い	な		っ	し	と	時	音	向	心	る	さん	が	私				
話	元	や	け	な		て	い	ま	計	が	か	配	だ	流	お	°				
し	気	く	る	か		体	°	っ	を	鳴	う	し	ろ	さ	そ	私				
声	な	市	の	か		育	そ	て	見	っ	°	な	う	れ	ら	が				
が		民	に	通		館			た	て	隣	が	う	て	ら	立				

が	つ	気	鳴		い	を	く	と	行	て		す	は	い	い	も	と	な	聞
親	け	に	き	奥	た	、	る	缶	っ	な	朝	ご	友	よ	た	何	頭	い	こ
と	て	か	声	の	だ	私	ぐ	詰	た	い	に	く	達	。	友	も	の	。	こ
離	い	か	が	方	い	と	ら	の	。	私	な	安	と	ま	達	手	中	（	こ
れ	た	か	響	で	た	妹	い	み	や	と	っ	心	こ	だ	が	に	で	今	こ
て	。	っ	い	は	。	は	お	だ	っ	妹	。	し	の	大	、	入	考	は	こ
し	手	人	て	、		一	い	っ	と	は	昨	て	土	丈	「	ら	え	ど	こ
ま	前	が	い	ペ		口	し	た	の	、	日	腰	佐	夫	今	な	ん	入	こ
っ	の	い	る	ッ		一	か	。	こ	残	の	が	清	。	い	な	な	り	こ
て	方	て	。	ト		口	っ	と	と	り	夕	抜	水	と	時	。	状	口	は
泣	で	、	左	連		噛	た	で	も	少	方	け	市	行	点	そ	況	は	窮
い	は	数	側	れ		み	。	も	ら	ない	五	そ	が	っ	で	の	に	な	屈
て	、	少	で	が		し	少	ら	え	食	時	う	人	て	死	と	な	っ	で
い	、	ない	は	多		め	し	た	た	料	か	にな	が	く	者	き	な	て	、
る	幼稚園	医	、	く		な	し	、	食	を	ら	っ	多	れ	は	、	な	い	入
。	の子	者	感	、		が	か	、	料	も	ら	た	す	た	い	す	っ	る	れ
私	子供	が	染	犬		ら	な	涙	は	ら	い	こ	ぐ	た	な	ぎ	の	そ	う
は	達	駆	性	や		な	い	が	、	い	っ	と	近	こ	て	て	情	う	も
こ		け	の	猫		が	食	出	水	に	。	に	く	、	報	報	：	も	も
ん			病	の		ら	料	て					に	私	し	に	。	。	も

流	津	こ	ア	き	だ	地	し	っ	良	学	こ	落	と	、	育	さ		所	な
れ	波	の	ナ	た	け	震	た	っ	く	生	と	ち	、	み	館	ん	手	の	状
た	警	南	ウ	よ	暗	が	°	い	し	た	は	着	焦	ん	全	い	手	手	況
瞬	報	海	ン	う	か	起		た	よ	ち	全	か	っ	な	体	た	伝	伝	わ
間	を	ト	ス	に	っ	き		°	う	も	て	せ	て	に	に	の	い	い	少
、	解	ラ	が	感	た	た		私	と	、	や	たり	い	配	お	で	を	し	し
避	除	フ	流	じ	避	あ		は	、	必	っ	す	て	る	っ	、	し	た	で
難	し	地	れ	ら	難	の		そ	み	死	た	る	な	た	て	安	て	°	も
所	ま	震	た	れ	所	日		の	ん	に	°	こ	か	の	い	心	人		落
は	す	で	°	た	に	か		光	な	生	他	と	か	汁	た	し	の		ち
笑	°	の		°	も	ら		景	で	き	に	な	静	物	ト	て	中		着
顔		死		そ	、	少		を	協	よ	手	ど	ま	を	イ	手	に		か
で		者		の	少	し		見	力	う	伝	、	ら	作	レ	伝	は		せ
あ		は		と	笑	経		て	し	と	っ	自	な	っ	わ	い	中		る
ふ		0		き	顔	っ		、	て	、	て	分	い	た	掃	が	学		た
れ		人		、	が	て		す	作	今	い	に	た	除	除	生			め
か		で		市	戻	、		ご	業	の	た	で	人	し	し	が			、
え		し		全	っ	あ		く	を	状	人	き	た	る	た	た			避
っ		た		体	て	れ		感	頑	況	や	る	る	こ	り	°	く		難
				に				動	張	を	中					体			

																		れ	た	た	た
																		か	た	が	た
																		ら	こ	、	。
																		の	の	土	地
																		復	地	佐	震
																		興	震	清	に
																		を	に	水	よ
																		頑	よ	市	っ
																		張	る	の	て
																		っ	恐	み	建
																		て	怖	ん	物
																		い	は	な	な
																		き	残	な	ど
																		た	っ	の	は
																		い	て	心	流
																		。	い	は	さ
																			る	崩	れ
																			が	れ	て
																			、	な	し
																			か	ま	ま
																			っ	っ	っ

は	た		か	会	た	ま	は	て		が	っ	く	よ	場	も	の					希
言	。	ま	し	え	。	に	○	い	南	出	た	な	っ	所	の	日	二				望
い	狭	ま	、	た	私	よ	名	た	海	た	の	ん	っ	、	公	常	○				の
が	い	ず	本	と	も	か	だ	た	ト	。	に	て	て	私	園	を	二				街
た	と	大	当	き	事	っ	っ	め	ラ	あ	、	い	込	達	が	奪	○				、
い	こ	変	に	は	が	た	た	、	フ	っ	流	ま	ま	の	、	っ	年				土
プ	ろ	だ	大	本	落	ー	。	怪	大	と	さ	れ	れ	清	お	て	某				佐
ラ	で	っ	変	当	ち	人	「	我	震	い	れ	て	い	水	気	い	日				清
イ	の	の	な	に	着	々	み	人	災	う	て	い	っ	が	に	っ	、				水
バ	、	は	の	心	い	は	ん	は	へ	間	い	く	た	、	入	た	大				
シ	決	、	は	の	て	口	な	数	の	の	く	清	っ	全	り	。	き				三
ー	し	避	こ	底	き	を	が	人	対	事	水	水	た	、	の	な	揺				年
の	て	難	れ	か	て	そ	生	い	策	だ	を	を	。	全	お	死	れ				
問	守	所	か	ら	、	ろ	き	た	は	っ	見	思	失	て	店	で	と				
題	ら	で	ら	安	久	え	ち	も	前	た	て	っ	っ	、	が	逃	津				
。	れ	の	だ	堵	々	て	よ	の	々	。	自	て	か	思	、	げ	波				
人	い	生	っ	し	に	こ	っ	、	か		然	い	ら	い	。	た	は				
間	る	活	た	。	友	う	て	死	ら		と	な	気	津	い	。	私				
関	と	だ	。	し	達	い	ほ	者	さ		涙	か	付	波	っ	達					
係		っ			に	っ	ん		れ					に	の						

色	ぱ	合	だ	強	し	困	か	も	高	し	を	の	必	ン	館	こ	。	状	の
々	い	っ	仲	さ	た	難	っ	い	校	て	感	非	要	テ	の	れ		況	ト
な	な	た	間	が	の	な	た	て	受	も	じ	日	な	イ	堅	か		の	ラ
思	中	。	は	あ	だ	状	。	ま	験	ぬ	た	常	物	ア	い	ら		中	ブ
い	で	そ	全	っ	。	況	そ	と	の	ぐ	と	な	資	の	床	の		で	ル
は	も	れ	て	た	本	の	れ	も	こ	い	き	生	を	方	が	事		復	も
あ	共	ぞ	の	か	当	中	で	に	と	き	だ	活	送	々	私	な		興	た
れ	に	れ	面	ら	に	で	も	受	だ	れ	っ	の	っ	が	達	ん		の	び
ど	励	が	で	だ	頑	三	私	験	。	な	た	中	て	来	に	て		事	た
、	ま	悩	私	と	張	年	達	勉	し	い	。	で	く	て	現	考		な	び
共	し	み	を	思	っ	生	は	強	家	不	し	、	だ	く	実	え	ん	て	起
通	合	を	支	う	た	全	諦	が	が	安	か	久	さ	だ	を	た	て	こ	っ
し	っ	持	え	。	。	員	め	で	流	が	し	し	る	さ	突	く		考	っ
て	て	ち	て	共	み	が	な	き	さ	あ	、	ぶ	方	っ	き	な		え	て
一	き	、	く	に	ん	志	か	る	れ	っ	私	り	々	た	つ	か		ら	い
つ	た	不	れた	受	な	望	っ	状	し	た	達	に	も	り	け	っ		れ	た
の	。	安	、	験	の	校	た	況	ま	。	に	ぬ	い	、	た	た		な	。
思	み	に	支	に	思	に	。	で	っ	そ	は	く	た	生	。	。		か	こ
い	ん	い	え	挑	い	合	こ	は	た	れ	ど	も	。	活	ボ	体		っ	ん
が	な	っ	え	ん	の	格	の	な	人	は	う	り	こ	に	ラ	育		た	な

街	る	ち	の	が	に	街	も	い		で	「	か	一	度	前	物		「	あ
が	。	よ	手	で	全	も	う	っ	と	「	私	ら	つ	も	の	。		清	っ
栄		く	で	き	く	新	成	た	約		ら	こ	で	思	清	大		水	た
え		ち	「	よ	同	し	人	。	束		の	そ	は	っ	水	好		を	。
、		よ	と	う	じ	い	し	そ	を		手	気	な	た	に	き		取	
人		く	は	と	昔	清	た	れ	交		で	付	か	。	固	な		り	
が		顔	い	し	の	水	仲	ぞ	し		、	け	っ	執	清	。	戻		
和		を	か	て	街	へ	間	れ	て		俺	た	た	し	水	失	そ		
気		出	な	い	は	と	も	が	か		ら	の	。	て	を	っ	う		
藹		し	か	る	な	復	い	そ	ら		の	だ	支	っ	奪	っ	「		
々		て	っ	。	い	興	た	れ	早		手	。	え	て	わ	て			
に		は	た	約	け	し	。	ぞ	五		で		合	か	れ	、			
暮		地	け	束	れ	て	瓦	れ	年		清		い	ら	、	私			
ら		域	れ	の	ど	き	礫	の	の		水		、	う	は	今			
す		に	ど	よ	も	て	だ	道	月		を		励	だ	ま	ま			
、		貢	も	う	、	い	ら	へ	日		取		ま	だ	し	で			
そ		献	、	に	新	る	け	と	が		り		合	も	震				
ん		し	み	「	た	。	だ	進	過		戻		っ	の	と	切			
な		て	ん	私	な	そ	っ	み	ぎ		す		た	は	何	災			
		い	な	達	街	こ	た	、	て		が								

清水にまた戻るとわたしは信じている。